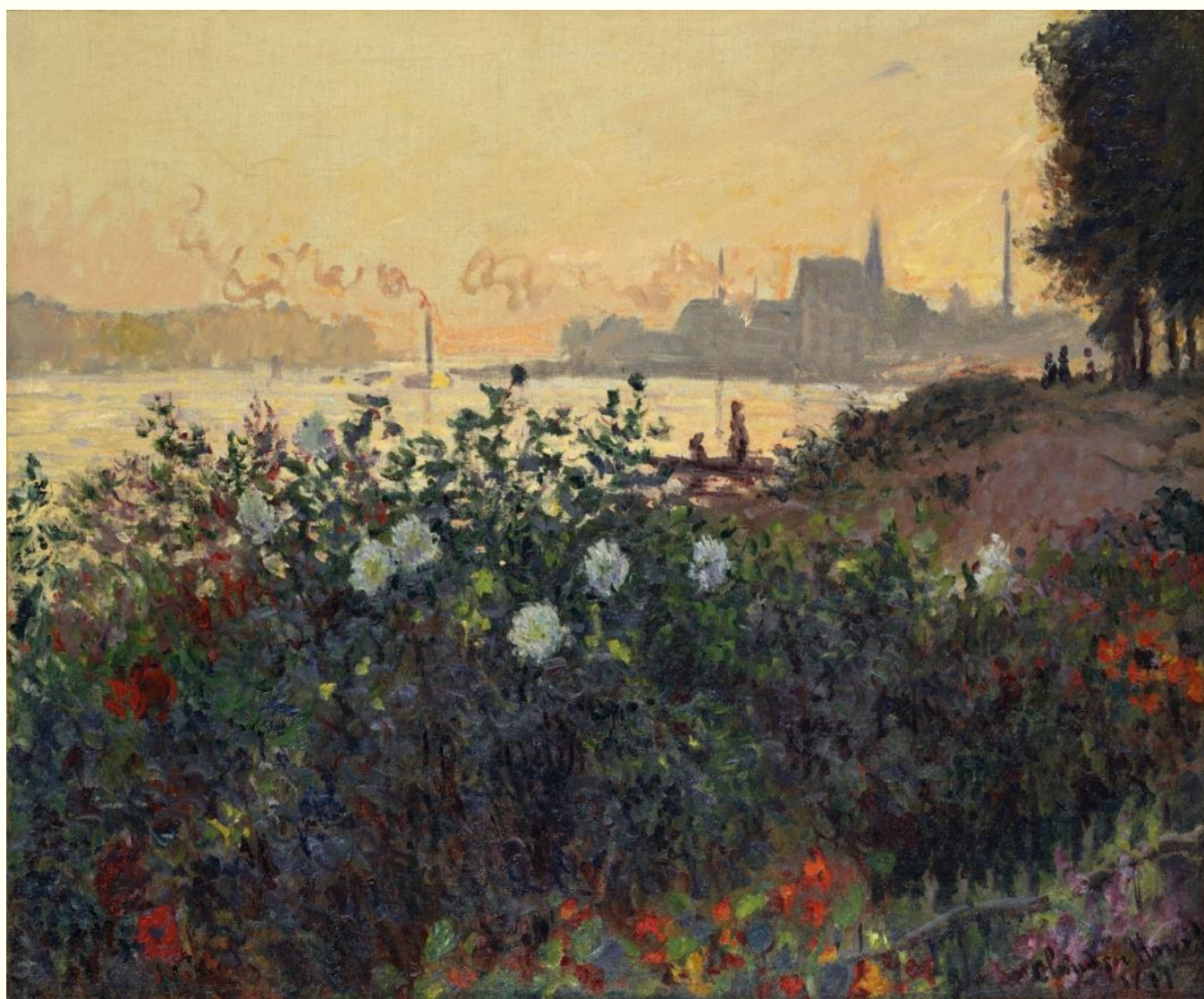


Nature and the City: Impressionism to École de Paris
自然と都市 印象派からエコール・ド・パリまで

2015.10.3 (土) – 2016.3.13 (日)



クロード・モネ《花咲く堤、アルジャントゥイユ》1877年

【報道に関するお問い合わせ】

ポーラ美術館 広報事務局 担当: そえじま副島、後藤、小椋、三井
TEL: 03-3575-9823 / FAX: 03-3574-0316 / Mail: polapr@kyodo-pr.co.jp

ポーラ美術館 広報担当: 中西
TEL: 0460-84-2111 / FAX: 0460-84-3108

展覧会概要

自然と都市にみる、フランス風景画100年の変遷。

自然と都市の風景は、時代とともに変化していく美意識を反映して、絵画のなかでさまざまに描かれてきました。近代化が進んだ19世紀後半、画家たちは自然と都市という二つの主題との新たな関わり方を模索します。移ろう光によって刻々と姿を変える自然の様相に主題を求めたモネ、未開の地タヒチを文明に対する理想郷として描き出したゴーガンなど、この時代における風景表現は多様な展開をみせます。また、シャガールが故郷の町を、デュフィが芸術都市の華やかな姿を描くとき、都市や町の風景は歴史や個人の記憶と深く結びつき、その絵画は画家たちの想いをあざやかに伝えます。

本展覧会では、ポーラ美術館の西洋絵画コレクションより、19世紀後半から20世紀初頭にかけての風景画約70点を紹介し、絵画に表わされた自然と都市の関わりを探ります。

みどころ1 モネ、シャガールらの風景画でたどるモダン・パリ

19世紀後半から20世紀初め、パリは近代化の波によって巨大な都市へと変貌をとげました。自然と近代的な建造物とが共存するパリの姿を目にした画家たちは、風景画の主題となる「自然」と「都市」をあらためて意識し、制作の新たな着想源としていきます。本展では、モネやシャガールら印象派からエコール・ド・パリの画家たちの風景画の名品によって、芸術都市パリを中心に「自然」と「都市」をめぐる美意識の変遷をひもときます。



マルク・シャガール《町の上で、ヴィテブスク》1915年
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015, Chagall® E1760



クロード・モネ《ルーアン大聖堂》1892年

みどころ2 箱根でパリ散歩！名画でめぐるパリ

パリでは、1889年と1900年に開催されたパリ万博を機に、エッフェル塔などパリを象徴するような建造物が多く建てられました。これらはパリの名所となり絵画の題材となったほか、ポストカードの題材としても人気を博しました。

本展では、絵画とポストカードを併せて展示し、絵画と写真の風景の切り取り方をご紹介するほか、会場で配布する地図を配した資料とともに、パリを散歩するように展覧会をお楽しみいただけます。



パリ、サン・ジェルヴェ教会より撮影
(ポストカード)



パリ・オペラ座の広場
(ポストカード)

みどころ3 レオナルド・フジタ(藤田嗣治)、ウジェーヌ・ブーダンの新収蔵作品を初公開！

このたびポーラ美術館では、「乳白色の下地」で世界的な名声を得た画家、レオナルド・フジタ(藤田嗣治)と、モネに戸外制作を教授した画家として知られるウジェーヌ・ブーダンの2作品を新収蔵しました。

この新収蔵により、フジタがエコール・ド・パリの画家として活躍した1920年代の作品が加わり、当館のレオナルド・フジタコレクションは176点となります。また、ブーダンのコレクションは3点となります。



レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《少女と猫》1926年
© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 E1760



ウジェーヌ・ブーダン《海洋の帆船》1873年

展覧会構成

第1章 自然へのアプローチ：観察と写実

19世紀の半ば、クールベやブーダン、歴史や神話に題材をとるアカデミズムから離れ、絵画の主題を現実の風景に求めて自然のなかに歩みをすすめました。モネはブーダンから戸外制作を学んで印象主義を展開し、うつろう光のもとで目にしたものをあざやかな色彩で直感的に表現しました。彼らは自然の観察をもとに、その美しさを発見しカンヴァスに写しとったのです。



クロード・モネ 《ジヴェルニーの積みわら》1884年



ジャン＝バティスト＝カミーユ・コロー 《森のなかの少女》1865-1870年頃

第2章 自然と都市の交差：近代化する自然



印象派の画家たちが活動した時代は、近代化とともに産業や鉄道網が発達した時代でもありました。自然と都市が交差する姿は、印象派の絵画にもあらわれ、自然を求めて行楽に訪れる都市の人々の姿や、近代的な建造物が描かれるようになります。ここではモネやルノワール、シスレーの作品から、自然と都市の要素が共存する風景画を紹介します。

クロード・モネ 《散歩》1875年



ポール・ゴーガン 《小屋の前の犬、タヒチ》1892年

第3章 ユートピアとしての自然：理想と憧れ

画家たちはしばしば、自然を描く上で自らの理想を投影してきましたが、近代化が進むにつれ、手つかずの自然や、文明化していない世界への憧れが加速していきました。彼らの多くは都市を離れ、ピサロは農村に、ゴッホは南仏のアルルに、ゴーガンはタヒチに憧れを抱き、自然を自らのユートピアとして描き出しました。

第4章 風景の記憶：都市に刻まれた時間



風景画には、その土地や人々の姿だけではなく、積み重ねられた都市の歴史や、そこで過ごした画家たちの記憶が描きこまれています。モネが陽の光を浴びて輝くルーアン大聖堂や、霧に包まれたヴェネツィアの都市を描くとき、彼の目は刻々と表情を変えていく光の様相だけでなく、建築物に刻まれた長い歴史をも捉えています。またロシアに生まれ、世界各地を転々としたシャガールは、移り住んだパリをはじめとする町と、故郷の町の記憶とを重ね合わせながら制作しました。

マルク・シャガール 《私と村》1923-1924年頃
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015, Chagall® E1760

第5章 パリの諸相：近代都市の肖像

パリは、19世紀後半から20世紀初めにかけて巨大な近代都市へと変貌します。この時期のパリでは、印象派からフォーヴィスム、エコール・ド・パリといった多くの美術の動向が生まれ、ヨーロッパにおける芸術の中心地となりました。芸術家たちは、エッフェル塔をはじめとする万博の際に建設されたモニュメンタルな建造物、あるいは都市整備から取り残された郷愁たどる街並みを、芸術都市パリのシンボルとして描きました。



ラウル・デュフィ 《パリ》1937年

作品解説：新収蔵作品2点と本展代表作品



日本初公開！モネの師・ブーダンの海景画

ウジェーヌ・ブーダン《海洋の帆船》1873年 油彩/カンヴァス

この海景がどこで制作されたのかは定かではありませんが、おそらくはフランスのブルターニュ地方、この時期にしばしば制作を行っていた、カマレ沖の海景であると推測されます。

ブーダンは1857年にル・アーヴルで若きモネと出会い、屋外で絵を描くことを教えた人物として知られていますが、この油彩画も、実景を目にして画家が受けた印象が留められた作品です。画面の低い位置に水平線を置き、画面下部の海の描写では、力強いタッチをすばやく重ねて、数隻の船が浮かぶ海面の波のうねりや揺らめきを表現しています。また画面上部を占める空には、湧き立つ雲が生き活きとした筆遣いで描き出されています。



1968年以來の公開！エコール・ド・パリ時代の乳白色の少女像

レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《少女と猫》1926年 油彩/カンヴァス

「すばらしい乳白色」と絶賛された独自の下地の技法を活かした表現により、フジタがパリで名声を獲得した時期に制作されました。肌の質感を思わせる滑らかな乳白色の下地には、細くやわらかな輪郭線が引かれるとともに、陰影を表わすぼかしと淡い彩色が施されており、フジタの技法の特徴をよく示しています。子どもや小動物など、フジタが生涯にわたり好んだモチーフを描いたきわめて早い時期の作品で、猫を胸に抱く少女の仕草は子どもらしい愛らしさを感じさせる一方、正面を見据えるまっすぐなまなざしと固く結ばれた口元からは、フジタの描く少女像らしい静かな威厳が伝わってきます。本作品はフジタが亡くなった1968年に、東京と京都で開催された「藤田嗣治追悼展」において代表作として出品されました。

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2015 E1760



自然と都市が共存する風景画

クロード・モネ《花咲く堤、アルジャントウイユ》1877年 油彩/カンヴァス

パリから約10kmに位置するセーヌ河畔の町アルジャントウイユは、1851年の鉄道開通以来、行楽地として賑わった町です。モネはのどかな自然に魅せられ1871年から約6年間、この町に住み制作を行ないましたが、この時期は急速に産業化が進み、町の姿が変貌していく最中でもありました。第4回印象派展に出品された本作品において、モネは建ち並ぶ町の建造物や蒸気船のシルエットを背景に、咲き誇る花々を手前に大きく描き、自然と都市とを対比させながら、ひとつの画面のなかに捉えようとしています。

開催概要

- 会 期： 2015年10月3日(土)～ 2016年3月13日(日) ※会期中無休
- 主 催： 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
- 作品点数： 約70点 ※会期中展示替あり
- 出品作家： ジャン＝バティスト＝カミーユ・コロー、ギュスターヴ・クールベ、ウジェーヌ・ブーダン
カミーユ・ピサロ、アルフレッド・シスレー、クロード・モネ、ピエール・オーギュスト・ルノワール、ポール・ゴーガン
フィンセント・ファン・ゴッホ、ピエール・ボナール、ラウル・デュフィ
レオナルド・フジタ(藤田嗣治)、マルク・シャガール他
- 会 場： ポーラ美術館(〒250-0631 神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285)
TEL:0460-84-2111 / FAX: 0460-84-3108 / 公式HP <http://www.polamuseum.or.jp>
- 開館時間： 9:00～17:00 (入館は16:30まで)
- 入 館 料： 個人料金: 大人1,800円、大高生1,300円、中小生700円
団体料金(15名以上): 大人1,500円、大高生1,100円、中小生500円
※料金はいずれも消費税込み。 ※小・中学生の入場については、土曜日は無料です。